

東京北郊における鉢物花卉栽培の持続的発展

— 鴻巣市寺谷を事例として —

齋藤 功

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| I はじめに | III-1 水稲の全面委託栽培 |
| II 鉢物花卉産地の形成 | III-2 花卉の山上げ栽培の進展 |
| II-1 野菜苗の振り売りとパンジーの導入 | III-3 寺谷の土地利用と花卉栽培の専門化 |
| II-2 鉢物花卉栽培の発展 | IV 花卉栽培の社会構造 |
| II-3 花卉市場の設立と花卉栽培の拡散 | V むすび |
| III 寺谷における花卉生産の構造 | |

I はじめに

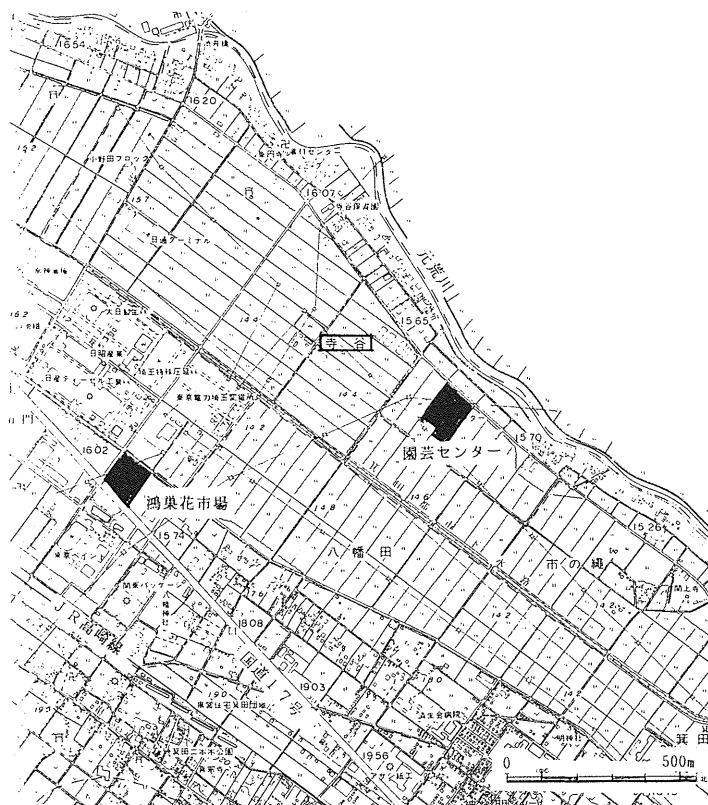
祭りや先祖を敬う儀式に花が古くから世界的に用いられてきたのは、花を愛する心が人類共通のものであることを示すものであろう。しかし、花の販売を目的にした商業的な花卉栽培は、日本では都市近郊農業の一形態として始まった。都市における需要の増大は、花卉生産地を都市近郊ばかりでなく、伊豆半島、渥美半島などの温暖地域や長野県などの高冷地に生みだした（太田，1979）。温暖な気温を活用した暖地性花卉園芸地域、特に伊豆半島については、岩崎（1935）の研究をはじめ、尾留川（1967）、松井（1968）によって研究されてきた。また、渥美半島については伊藤（1953）、松井（1967、1978）、太田（1977）によって園芸産地の形成過程が解明されている。さらに、尾崎（1962）は、マーガレットを指標に暖地性花卉園芸地域が無霜地帯に一致していることを明らかにした。しかし、冷涼な気候を活用した高冷地性花卉園芸農業についての研究は、余り進んでいない（Yamamoto, et. al., 1976）が、東北地方のやませの影響を受ける地域で高冷地の長野県同様、リンドウ等の花卉栽培が発展しているのが注目される（齋藤，1991）。

ここでは研究が最も古くから行われた近郊農業としての花卉栽培に焦点を当ててみたい。近郊農業としての花卉栽培は、東京南郊の世田谷（小田内，1918）、多摩川温室村（青鹿，1935；沢田，1968）、秦野盆地（沢田，1972）等で研究されてきた。また、東京東郊においては、特に鹿骨の鉢物栽培（山内・大内，1923；佐々木，1969）が注目された。彼らの明らかにした要点は、1)近郊の花卉栽培は、洋行帰りなど文化人によって始められた、2)花卉栽培は、付加価値が高いので観葉植物栽培とともに近郊農業の極相に近い、3)ガラス温室など設備投資に相当の資本が投下されている、4)花卉栽培は周辺の農家に影響を与え、農家で花卉栽培を行うものが表れた、等である。これら都市近郊の花卉栽培は、主として東京から南郊の、いわば暖地に展開したものである。

一方、東京の北郊では、従来、江戸時代の駒込付近の植木栽培が移動したといわれる安行の植木・

苗木¹⁾が注目されてきた(松田, 1971)が, 花卉園芸は見落とされがちであった。しかし, 近年東京北郊でも花卉栽培, とくに埼玉県の鴻巣市を中心とする花卉栽培の進展が著しい。鴻巣花卉園芸組合の記念誌によると戦後の混乱期に始まった花卉の露地栽培は, 先進地の見取り学習を通じて充実し, 順次施設園芸, 高等園芸へと発展してきたという(鴻巣花卉園芸組合, 1983)。また, 花卉市場を設置することによって販路が安定し, ますます規模拡大してきた。しかし, 埼玉県の花卉栽培の展開については, 農業地理学から研究すべき点も残されている。したがって, 本稿では鉢物を中心とした鴻巣市の花卉栽培の核心地, 寺谷集落の花卉栽培の発展過程を分析し, 現在の山上げ栽培や水稲の委託栽培などの実態を地域的複合関係を配慮して解明することによって, 近郊農業としての鉢物花卉栽培の今日的持続的特色を明らかにしたい。

調査対象の鴻巣市は東京の都心からほぼ50kmで, 近年高崎線に沿って都市化の波がおしよせている。調査の中心は鴻巣市にあっても元荒川の右岸の狭い自然堤防上に広がる寺谷集落である(第1図)。自然堤防の比高は, 2m内外で, その外側に後背地水田が広がる。かつて, 自然堤防上では桑が栽培され, 水田では米麦の2毛作が行われた, いわば埼玉県北部低地帯の特徴を備えた典型的集落といえよう。そのことは, 1980年の寺谷集落の経営耕地面積が, 46haで, そのうち78.3%にあたる36haが水田であったことにも表れている。なお, 本稿の考察は1988年当時のものが中心である。



第1図 調査対象地域

Ⅱ 鉢物花卉産地の形成

Ⅱ-1 野菜苗の振り売りとパンジーの導入

この元荒川の自然堤防上の集落寺谷における後背水田の収量は、半湿田であったため上流の川面、箕田などの水田より米の反収が1俵低かった。この減収分を補填するために第二次大戦中から始まったのが、母屋の庭先に苗床を設置した野菜苗作りである²⁾。この野菜苗造りの主力になったのが、武陽実業の農業科（現鴻巣高校）を1945年前後に卒業した竹内武之助、吉田正雄、森田茂一郎等であった。彼等は庭先に約50坪の苗床を造り、ナス苗、トマト苗を育て、それを4月28日から5月18日位まで売り歩いたという。つまり、ナス、キュウリ、トマトの野菜苗は、肩に懸ける籠と手に下げる箱にそれぞれ3段に重ね、500本を入れ、自転車に乗せて鴻巣駅まで、そこから列車で東京まで行き、山の手や下町の住宅地まで振り売りに行った。戦災で空地の多かった東京では野菜苗一本5円でも一軒10本、20本と購入するので良く売れたという。

庭先の苗床はサツマイモの苗床と同じように藁編みで、落ち葉、藁、下肥を入れて造られた。発熱を良くするため、新しい床には坪当たり米糠5升、古いものには米糠3升投入したという。苗床の保温は油紙を使った、いわゆる油障子であった。当時、野菜苗は坪当たり5～600本位栽培したので、自己の育成した野菜苗を売るのに20～25日間はかかった。価格が良い時には人の苗をも購入して売りにいったといわれる。野菜苗を収穫後、苗床は取り払われ、藁や落ち葉は庭の隅に積まれ、翌年の苗土とされた。

地元で「かつぎだし」と呼ばれたこの野菜苗の振り売りは、戦中から戦後、特に食糧難の時代には良い収入になったといわれる。この振り売りの過程で、寺谷の竹内武之助氏は新宿の種苗商から野菜苗とともに花の苗を作ってみないかと勧められた。そこでパンジーを栽培して1948年に販売したところ、戦後の食糧難の時代にもかかわらずパンジー苗が野菜苗よりもよく売れた。それを見習った近所の野菜苗生産者も花卉栽培を始めたので、1950年には寺谷における花卉栽培者は6名となった。当時は、パンジー、デージー等の花壇用草花の栽培が中心であった（鴻巣花卉園芸組合、1983）。このことは、食糧難時代であっても人々はうるおいのある花を植え、明るさを失なわなかったことを意味するものであろう³⁾。

Ⅱ-2 物花卉栽培の発展

鴻巣市寺谷では花壇用のパンジー、デージーは、3月15日から4月30日頃まで振り売りされ、続いて野菜苗の振り売りが行われた。野菜苗の販売が終わると麦刈り、田植えと農作業が続いた。なお、屋敷周りの畑地ではパンジーの跡に地這キュウリが栽培され、7月15日頃から販売され8月15日頃までに終了した。というのは、8月15日から31日頃までにパンジーの種子が同一の畑に蒔かれたからである。したがって、当時の作付体系は水田での米麦2毛作、畑地でのパンジー・地這キュウリの2毛作であった。

野菜苗は、日本経済の回復した1952・1953年頃から売行きが芳しくなくなったので、苗床用フレー

ムで半促成のキュウリ栽培が行われた。しかし、キュウリは5年も連作すると忌地性のため蔓枯病が発生したため、半促成のナス栽培に移行した。これは、「金井の鈴なり」という多収穫品種が出たためである。しかし、このナスも5年も連作すると忌地性が表れ、花卉栽培に全面的に変わったという⁴⁾。なお、現在でも道永（どうえ）に野菜苗を販売する農家が一軒みられるように、野菜苗の栽培は、部分的に1960年頃まで続いた。

半促成のキュウリ・ナスの栽培により寺谷では18名で寺谷そ菜出荷組合が設立され、オート三輪による野菜・花卉の出荷が始まった。オート三輪は1950年竹内氏が最も早く導入し、野菜苗を東京に出荷したが、多くは1955年頃からの導入であった。それ以前から野菜と同じフレームによる鉢物花卉栽培が盛んになり、正月用ハボタン、春の矢車草、サイネリア等をオート三輪で東京を始め長野まで売り歩いたという。1953年の花卉栽培者は17名となり、1960年頃に寺谷そ菜出荷組合は花卉栽培組合に変容した。

花の栽培技術は鉢物栽培の先進地江戸川区鹿骨に見学に行ったが、教えてもらえず、そこの鉢物花卉栽培者の作業を見よう見まねで学んだ。鴻巣ではこのような見学を「見取り学習」とよんでいた。

1957年には30坪のビニールハウスが12棟建設され、シクラメン導入の契期となった。1961年一人の花卉栽培者が250坪の大型ハウスを建設し、サイネリアを栽培したところ、従来3月初旬に咲いた花が1月に咲き高く売れたので、多くの人がそれに倣って、大型ハウスが急速に普及した。1963年には寺谷花組合が18名で組織されている。この時点で道永、川面を含めると鴻巣市の花卉栽培者は34名となっていた。1965年には前述の花に加え鉢植バラ、シクラメン、サツキなど高級鉢植草花が栽培され、1973年には鴻巣花卉園芸組合が78名で設立され、寺谷花組合はその支部となった。寺谷の花卉栽培集団は1981年に朝日農業賞、埼玉県代表として1983年に日本農業賞を受賞した。

II-3 花卉市場の設立と花卉栽培の拡散

寺谷を中心とする鴻巣市で栽培された花卉は、前述のように電車と徒歩を利用した振り売り、オート三輪での東京出荷および地方市場への出荷がなされてきた。地元には花卉市場を造ることは、出荷や販売にかかる時間を短縮し、それに花卉栽培に振り向けることによって経営の集約化、ひいては規模拡大をはかることができるので、花卉生産者の悲願であった。特に、寺谷の花卉栽培の創始者で、最も規模を大きく経営していた竹内武之助にとって、それは価格の安定につながるので切実な問題であった。そこで同氏は花卉栽培を勧められた新宿の小林熊太郎（東都園芸小林商店）と計り、総合的な花卉市場を目指して、1966年埼玉総合園芸株式会社（以下埼玉総と略す）を設立し、北本町深井に市場を開設した。この市場は1967年国道17号線沿いの現在地鴻巣市八幡田に移り、今日の基礎を築いた（森田・半田、1986）。

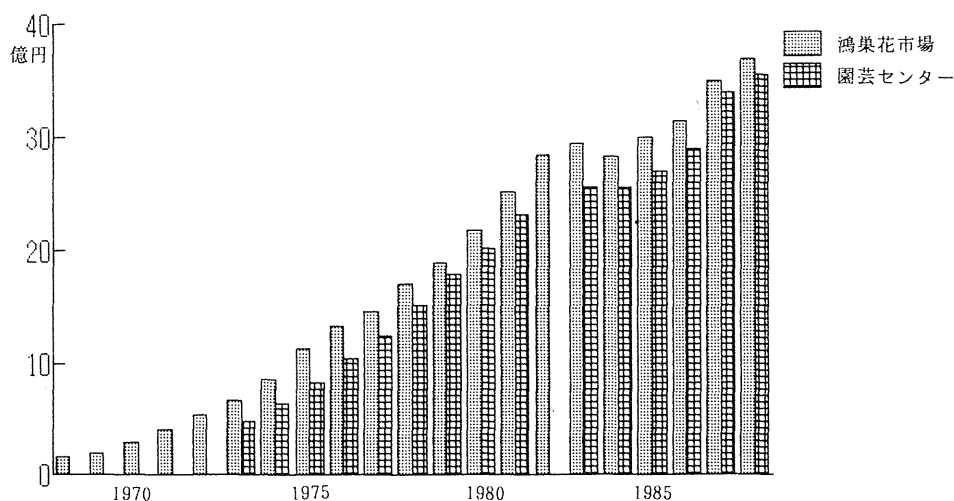
埼玉総の鴻巣花市場は、当初開設日が週一回であったが、入荷量の増大と共に週2回になった。1970年には売場がビニールハウスから新社屋に変わり、1976年には売場面積を増設した。埼玉総の鴻巣花市場には遠くは愛知県の稲沢市を始め関東近県の花卉栽培者および花卉販売者が集まるようになった。しかし、鉢物市場の性質上、開設日が隔日⁵⁾となることから、寺谷ではもっと身近な花卉市場の設立

も要望された。そこで先覚者の一人である吉田正雄氏が中心となり、花卉栽培組合員110名の出資を受けて、1972年12月に鴻巣園芸センターが生産地に接して寺谷の水田を埋め立てて設立された。

市場の設立が花卉栽培の発展を促し、花卉栽培の発展が市場の発展を促すという補完関係が生まれた。すなわち、両市場は花卉の取扱量の増大に対処し、何回かの施設拡張、鉢物を並べる台車の大幅増加、鉢等の資材の斡旋を行い、事業を発展させてきた。つまり、第2図に示したように両市場の花卉の取扱高は、1975年ともに5億円を超え、1977年には10億、1981年には20億、1987年には30億を超え順調な発展をしてきた。このような花卉取扱量の増大は、市場に出荷される花卉の種類を増大および付加価値の高い高級品種の栽培によってもたらされたものである。花卉取扱量の増大に連れて埼綜では1985年から園芸センターでは1987年から伝票も算盤からコンピューター処理に変わった。現在、埼綜の鴻巣花市場の競り市日は、月、水、金で、園芸センターのそれは火、木、土となっている（写真1）。

ところで、花卉の流通形態は複雑である。出荷にしても前述の2市場に加え、以前花卉を出荷していた荻窪、東久留米等の市場から農家に直接電話が入り、市場の車が集荷に来ることもある。このような域外市場の取り扱い量は、鴻巣市では全体の約1/3に達し、川里村では10%に達するという。さらに、花卉の運送業者が帰り荷を運ぶため、農家に電話連絡し、花卉を引取に来る場合もあるという。なお、川里村では新農業構造改善事業により1986年に農協の花卉集出荷施設ができたので、花卉の系統出荷も1/4に達するまでになった。かくて花卉の栽培農家は産地市場に最も大きく依存しながらも、花卉の品種や出来栄によって多様な市場を選択することが可能となった。これは、都市近郊における花卉栽培の特色を示すものといえよう。

前述のような花卉市場における取り扱い量の増大は、個々の花卉栽培者の規模拡大ばかりでなく、花卉栽培者の地域的拡散によってもたらされた。鴻巣市内では花卉栽培は核心地寺谷とほぼ同じ条件



第2図 花卉市場の売上高の推移
鴻巣花卉園芸組合(1983)および聞き取りによる

を備えていた、元荒川流域の道永、川面、安養寺へと拡がり、ついで行田市、川里村へと拡散した。第1表に示したように1970年代に戸数において川里村が鴻巣市を超越した。川里村では花卉栽培は、当初寺谷と元荒川を挟んで向かい合う舟塚地区に入り、ついで徐々に屈巢地区に伝播した。この花卉栽培は1973年のオイルショックの後に、ハウスキュウリやナスの産地であった広田地区に入り、一気に増加した。これは、燃料価格の高騰と連作障害で新たな作物が求められていた時期に、冬季の栽培温度が低くて済む花壇用草花生産に転換する農家が増え、鉢花栽培に発展したのである(加藤, 1988)。しかし、川里村の花はリンドウ、プリムラ類、ボサギク等で、水田での米麦栽培と労働力の競合を避けることのできるものであった。広田や屈巢の花卉は、家周りで栽培されているため、寺谷のように集団的花卉栽培景観がみられない。事実、花卉栽培が進展したとはいえ、現在でも野菜苗やナスのビニールハウス栽培が盛んにみられる。

第1表 花卉栽培の拡散

年	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1981	1983	1987	1988
市	25	30	35	40	45	50	56	58	62	元年
鴻巣	5	18	25	34	55	74	86	87	88	75
行田			1	8	29	40	47	43	45	40
川里				3	11	56	118	57	45	73
吹上					4	6	10		10	
北本								6	24	34
吉見								6	9	16

鴻巣花卉園芸組合(1983)および県庁資料による

Ⅲ 寺谷における花卉生産の構造

花卉栽培の発展過程で農家は何度かの意志決定を迫られることがある。寺谷においてはほぼ5年ごとにそのような時期が訪れたと思われる。それは、パンジーの花卉栽培が始まった1948年、日本経済の回復とともにオート三輪を購入し、野菜苗から鉢物花卉へ指向した1953年、ビニールハウスを建築し、サイネリア、シクラメンなどの高級鉢物に指向した1958年前後である。この頃には見取り学習から始めた花卉の栽培技術が確立し、以後10年間は地元には花卉市場も設立され、花卉栽培者が様々な試行錯誤を繰り返した時期といえる。また1973年は、このほぼ10年後に花卉栽培の安定をはかって地元市場が設立されている。このそれぞれの時点でそれぞれの農家は複合経営のなかで花卉部門を伸ばすか、従来の米麦に力を入れるか、あるいは都市化に対応して兼業化・脱農化するかなど、いずれの道を選択するかという意志決定を迫られたといえる。つまり、それぞれの時期に巧く適応できたものが花卉栽培の専門化を続け、適応できなかったものが、複合経営を維持し、あるいは脱農化してきたと考えられる。したがって、それぞれの時期は花卉栽培の持続的発展を支える契機となったといえる。

しかし、鴻巣が今日の鉢物花卉栽培の中心地になる契機となったのは、鴻巣園芸組合が組織された1973年前後に訪れた水稲の委託栽培と花卉の山上げ栽培の実施にあると思われるので、以下その点に焦点を当て土地利用との関連を解明したい。

Ⅲ-1 水稲の全面委託栽培

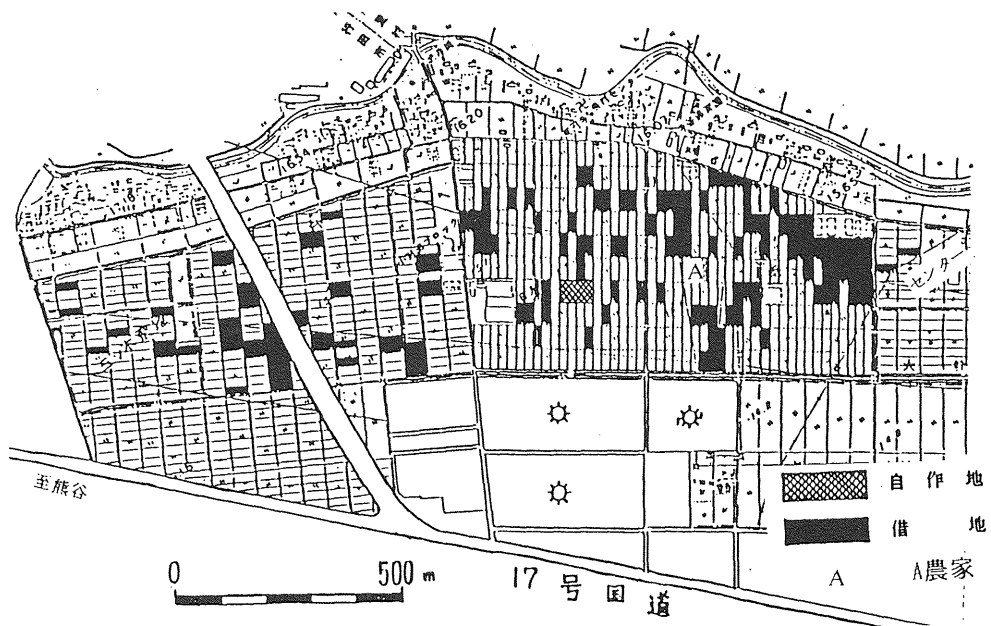
寺谷における水稲の委託栽培は、1973年のオイルショック後、花卉栽培者が茨城県の真壁に植木鉢を送るようバスで要請に行った帰りに、水稲・花卉複合経営者の一人A氏が「もし水稲栽培を委託する者があれば、自分が受託して栽培したい」という意志表明をした。この話題は、水田面積が広く花卉栽培も比較的大きくやっている複合経営農家の賛同を受け、早速1973年から発足した。すなわち、水稲・花卉複合経営農家が、米麦生産に専門家する農家に水稲栽培を委託することによって、ますます花卉栽培に専門化し、企業化することが可能となるからである。一方、水稲栽培に志向する農家にとっても、花卉栽培農家の水稲栽培を受託することによって、経営規模を拡大し、自立経営を達成することが可能となるからである。

ところで、水稲栽培受託農家A氏は、その決断に先立ち1969年に大型トラクター・コンバインを購入して、水稲栽培の作業受託を行っていたのである。当初は水田の耕耘から出発し、次第に水稲の刈取、田植、防除へと進んだ。しかし、1973年から始まった契約栽培は、借地によるため受託農家の意思で水稲栽培ができるという点で、画期的なものであった。すなわち、水稲受託栽培農家が自由に水稲品種を決定し、土地の条件によって裏作の小麦も栽培可能になったからである。また、規模拡大によって圃場の集団化ができ、計画的生産が可能となったため作業効率が上がる結果となった。もちろん、受託農家は反当たり2俵の米を稲藁とともに委託農家に返還するという契約条件であった。

ここで寺谷における水稲の委託栽培の状況をみよう。水稲の受託栽培を最初に始めた農家Aの受託水田は、17haで⁶⁾、第3図に示したように寺谷ばかりでなく川面、箕田にも及んでいる。また、農家Bと農家Cも合わせて13haの水田面積を受託しているので、全体の水稲の契約栽培面積は30haになる。農家Aは、他の2軒の農家とともに1978年寺谷農機具利用組合を組織し、消毒などは3戸の共同作業として実施していた（関東農政局、1985）。

このように水稲の受託栽培を行う農家は、トラクター、コンバイン等の農業機械を装備しなければならない。この農業機械の購入は、個人より寺谷農機具利用組合のような団体の方が有利である。というのは団体の方が、農業機械の購入にあたって各種の制度資金などの融資が受けやすいからである。たとえば、農家Aは1973年から地域農政整備事業の融資850万円を受け、田植機に加えコンバイン、トラクター、乾燥機、ライスグレーダー（糶摺機）など水稲の一貫生産に必要な農業機械を導入している。また、1974年には水稲地上防除機導入事業の融資を受け、防除機を購入している。なお、不足分は近代化資金を借りているので、機械装備は莫大な額になっている。

現在のところ寺谷農機具利用組合の3名は、水稲の防除事業を共同で行なっているにすぎない。しかし、この水稲の請負耕作が鴻巣市のより高級な花卉である鉢物産地の形成に果たした役割は大きいといえよう。



第3図 水稻の委託栽培地の分布
 関東農政局（1985）p.186より転載

Ⅲ-2 花卉の山上げ栽培の進展

花卉の山上げ栽培は、早期に冬の来る高冷地で花卉苗を寒さに合わせることによって花芽分化を促進し、本来、春に咲く花を価格の良いクリスマスや正月に合わせて開花させ、出荷しようとするものである⁷⁾。埼玉県では1963年から軽井沢で花卉の山上げ栽培が始まり、寺谷では1966年吉田正雄氏が吉田新次氏、川里の及川氏、羽生の鈴木氏と計り、シクラメンを軽井沢へ山上げしたのを嚆矢とする。つまり、軽井沢の古宿の土屋安二郎氏は花が好きだったので、彼らに山上げ栽培地を提供したのである。しかし、同氏は3年後自ら花卉栽培を始めたので、山上げ栽培者はその後、同氏の斡旋で軽井沢の古宿を中心に半径4 km以内の土地を借りて現在に至っている。なお当時、寺谷の竹内氏が北軽井沢に、川越の不老院氏が軽井沢に山上げしていたという。

また、花卉の山上げ栽培は、日光イチゴの山上げ栽培の事例を見習い、1972年から戦場ヶ原開拓で始まり、すぐ川里村にも波及した。山上げ栽培地は、栃木県の戦場ヶ原(1,400m)・鶏頂山(1,200m)、長野県の軽井沢(1,000m)、山梨県の小淵沢(700m)、および埼玉県の秩父(700m)など標高の高い高冷地であった。しかし、鶏頂山は霧が発生し過ぎ、小淵沢や秩父は花卉の山上げ栽培には低すぎるといわれる。筆者はかつてこのような高冷地をブナ帯として、イチゴの山上げ栽培、花卉の鉢上げ栽培、夏野菜栽培地帯と一致することを示唆した(斎藤, 1982, 1988)。

山上げ栽培は、川里村では150軒の花弁栽培農家のうち50戸の農家が実施しているという。山上げ栽培地は、栃木県の戦場ヶ原および長野県の軽井沢町古宿周辺である。山上げされる花卉は、カランコエ、オブコ・ポリアンサス・ジュリアンのプリムラ類、シクラメン、アルメリア、シンビジウム等

で、期間は6月末から9月末までの3ヶ月間である。鴻巣市や行田市の花弁栽培者はシクラメン、カランコエ、シンビジウム等が多い。埼玉県の花弁の山上げ栽培は、戦場ヶ原が90%、軽井沢5%、小淵沢・秩父5%であるという⁸⁾。そこで、以下戦場ヶ原開拓での山上げ栽培の推移と実態についてみよう。

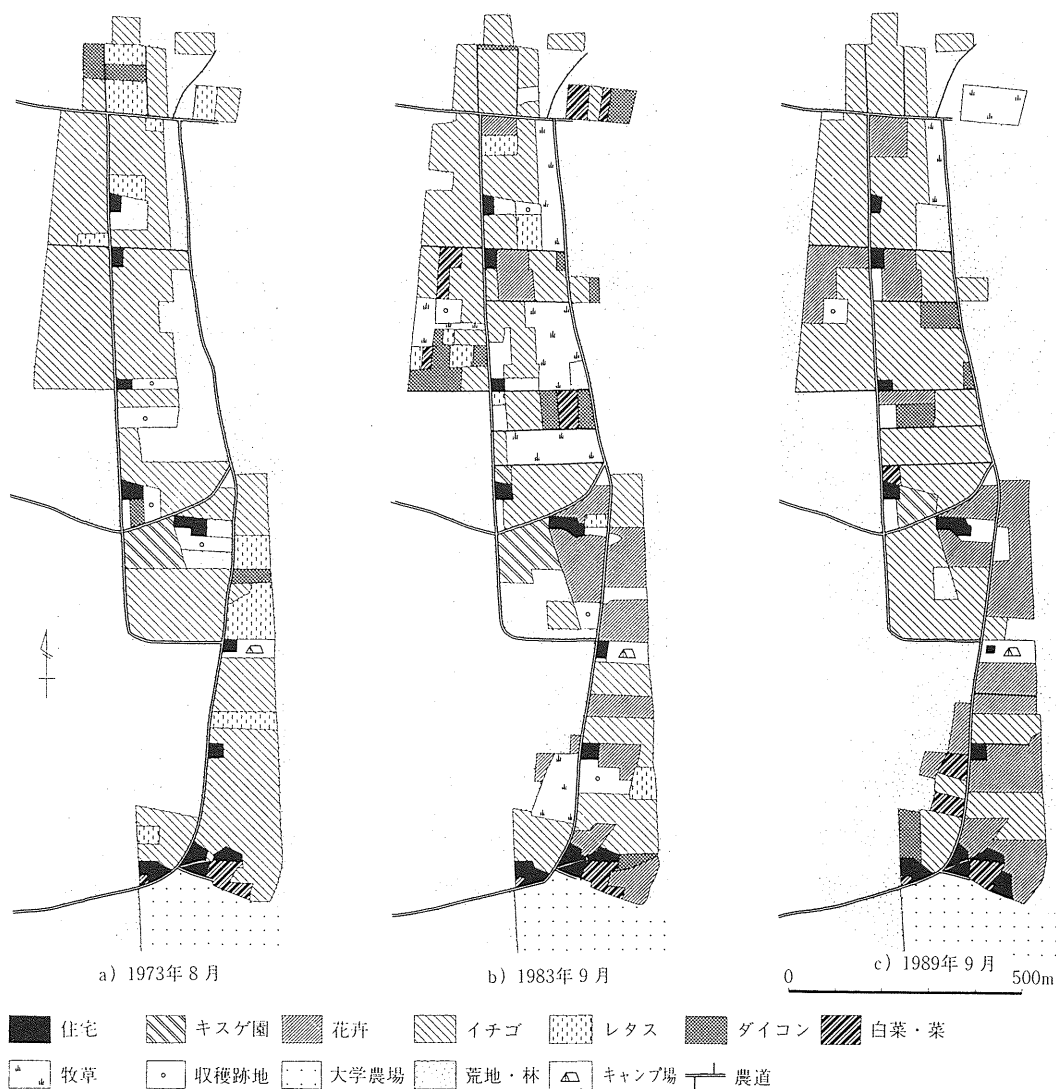
戦場ヶ原開拓地ではダイコン栽培の衰退に伴いイチゴの山上げ栽培が行われるようになった。1977年当時戦場ヶ原開拓地はイチゴ苗が殆どで、若干の野菜と花卉は観光客用のニコウキスゲ園のみであった。当時、鶏頂山開拓では雲間草、プリムラ・ポリアンサスの山上げが一部でみられる程度であった(斎藤, 1981)。ところが、1983年になると、花卉がイチゴ苗と拮抗し、凌駕する勢いであった。イチゴは山上げ期間が8月中旬から9月下旬までと短くなったため、イチゴ畑の一部にはレタス等が栽培されていたが、イチゴ苗が最大の面積となった9月23日に調査したものである(第4図)。花卉ではシクラメンを栽培する温室が増えたばかりでなく、ポリアンサス、カランコエ、オボコ等の鉢物が寒冷紗をかけたビニールトンネル、露地栽培されていた(写真2)。1989年10月2日にはイチゴは殆ど山下げされていたが、畑の隅に置かれたランナー等の残存状況を見てイチゴ畑と判断した。それによると戦場ヶ原開拓の土地利用は花卉とイチゴ苗の栽培が支配的であることが判明する。花卉栽培は、戦場ヶ原開拓地の東南部と中部に集中していることがわかる。人によっては一人で2haの花弁を栽培している人もいるという。このような人たちは、寝泊まりできる簡易小屋を建ててサイネリア、シクラメン(写真3)、雲間草等の管理をしているのである。

一方、鶏頂山開拓は波状地形に加え、霧が多く発生するので嫌われ、花卉栽培者は標高が高く、平坦地で作業がしやすい戦場ヶ原開拓地に集中しつつある。戦場ヶ原開拓地に集中する理由の一つは、花にかける水を得る水利権ごと借地できるからであるという。山上げた花卉の管理は、本来的には栽培者自身が行うべきものであるが、規模の大きな花卉園芸農家では、管理を委託したり、雇用者に管理させる形態もある。このように、花卉の山上げ栽培は規模拡大や花卉の品質向上につながるので、産地形成に果たした役割は大きいといえよう。

III-3 寺谷の土地利用と花卉栽培の専門化

第5図は1987年4月の寺谷の土地利用を示したものである。北西から南東に流れる元荒川の自然堤防上に集落があり、かつての畑地部分に花卉栽培用の温室群が存在することがわかる。これら花卉温室群は、ガラス温室から硬質ビニールハウスまで様々であるが、一般に花卉栽培農家の前の、いわば庭先に設置されている。しかし、これらの温室群の景観は寺谷地区が高等花卉園芸地域に変貌を遂げたことがうなづける。また、農家と温室群を挟んだ道路の水田側にあるのは、すべて水田を埋め立てて設置されたものである。すなわち、花卉市場の鴻巣園芸センターをはじめ、温室の水田への進出が著しい。

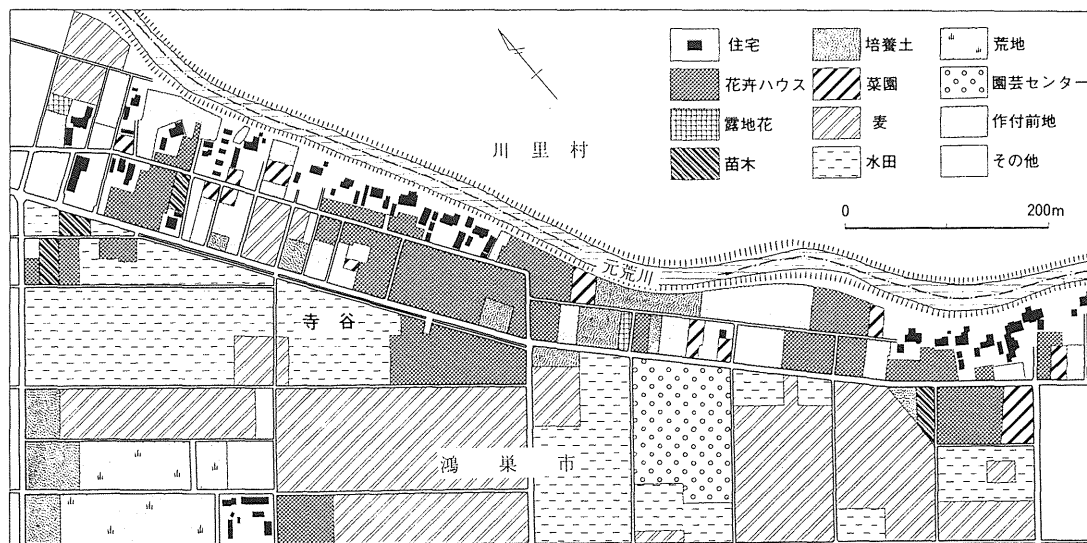
花卉の露地栽培はパンジーや芝桜などであったが、僅かに見られたにすぎない。かつてパンジーが温室群の位置を占めていたと考えると、それらは初期の花弁栽培景観の残象といえよう(写真4)。なお、土地利用調査が3月下旬から4月上旬であれば、パンジーがもっと多かったと思われる。とい



第4図 戦場ヶ原における花卉栽培地の増加
現地調査による

うのは、1989年4月7日に観察したところ露地栽培のパンジーを出荷するために鉢植えしている様子が見られたからである。

温室の中にはポリアンサス、ジュリアン、オブコなどプリムラ（さくら草）系の様々な鉢物花卉が置かれていた（写真5）。このことは各種の花卉が様々な輪作体系で栽培されることを意味するものである。前述の山上げされる花卉は、カラコエ、プリムラ類、シクラメンなどの順序で山下げされるので、同一の温室が少なくとも2～3回利用される結果となる（桶川農業改良普及所、1982）。事実、カラコエやシクラメンを戦場ヶ原等に山上げしている花卉栽培農家は、7月10日前後に山上



第5図 寺谷の土地利用
現地調査（1987年4月）による

げし、前者は8月31日頃に、後者は10月10日頃に山から下げる。山下げされた花卉は、ハウスのなかで開花する。もちろん、栽培する花卉の品種は農家によって異なるが、一般的にはハウス内では3～4の品種の鉢が回転されることになる。したがって、温室は地元の露地栽培で鉢上げされたシネリリアやグロキシアの花卉ばかりでなく、山上げた花卉の山下げによって集約化、つまり高度利用されることになる。

土地利用調査を通じて明らかになったことは、栽培される花卉が高級化していることである。つまり、単価の高いセントポーリア、シンビジウムのような蘭類などの高級品種が存在することである。また、ゴールデンクレストやグリーンボールなどの新しい品種も多い。事実、となりの人に花や観葉植物の名前を聞いても分からない新品種も存在する。新品種を摸索し、それがヒット商品になれば大きな収入が得られるからである。たとえば、以前からカラコエを栽培していたY氏は、ヨーロッパから新しい5品種を持ち帰り、黄花とピンクの花のカラコエでヒット商品を作り出したという。花卉のヒット商品が種子で繁殖するものであれば、1～2年で普及し、挿し芽や挿し枝で増植するものであれば、4～5年で拡散するという。だから花卉栽培の先進地寺谷では高級品種を求めて、農閑期に世界各地に旅行するなど、花卉生産者同士しのぎを削っているといえる。

なお、花卉の高級化に伴い植木鉢も土製の鉢からプラスチックの鉢に変化した。真壁などの土製の植木鉢は地味な茶褐色の単色で重いのにに対し、プラスチック製の鉢は多様な色彩が可能であり、しかも軽量である。この多彩で軽量の鉢は新しい品種の花卉に調和し、アパートやマンションなどタウン感覚にマッチして需要を伸ばしたといえる。

一方、水田は休耕地より麦作地の方が若干多かった。また年により麦作地は移動しているように思

われた。特徴的なことは、培養土をつくるための土置場が目立つことである（写真6）。土置場は鉢にすぐ入れることのできる培養土から、藁の束を積んだ上に関東ローンを載せ、培養土造りのものまでであった。この土造りの場所は、水田を埋め立てて造成されたところも存在した。花卉の鉢物生産は、いわば土を売る商売ともいえる。また、苔はシンビジウムや観葉植物には欠かせないもので、独自に山地に取りにいくという。したがって、花卉栽培に直接必要な種子や肥料、薬剤ばかりでなく、土や鉢に必要な苔などを考えれば、関係圏は歴史的にも深く、地域的にも広がると考えられる⁹⁾。

IV 花卉栽培の社会構造

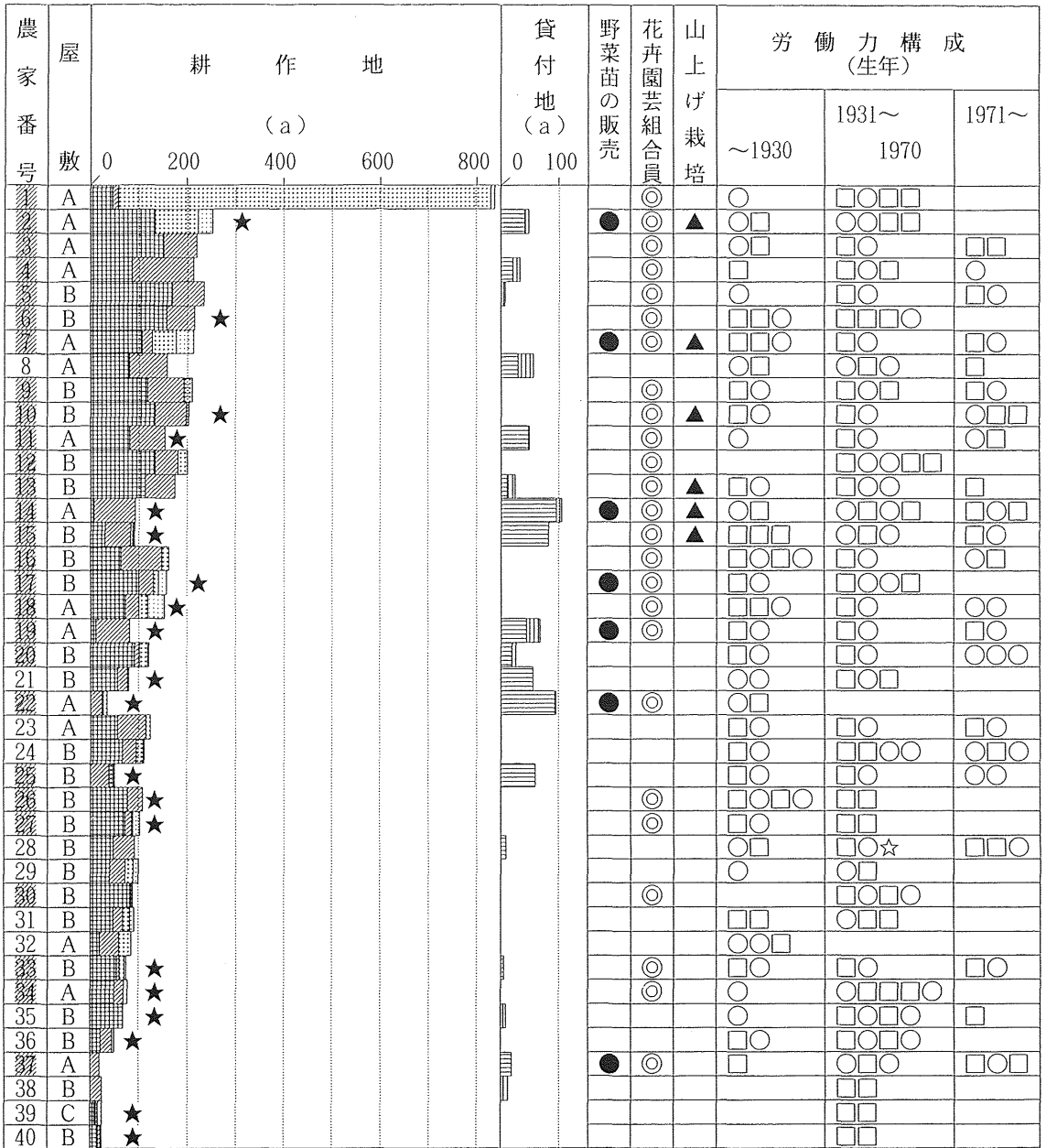
花卉栽培の核心地鴻巣市寺谷の土地利用をてがかりに、水稻の委託栽培や花卉の山上げ栽培の進展と並んで花卉栽培の専門化・高級化の実態を報告してきた。ここでは農家単位に焦点をあてて社会構造から花卉栽培の持続性を明らかにしたい。

土地利用図に示した寺谷の農家戸数41戸のうち1989年現在、花卉栽培しているのは26戸である。第6図には、農家（農家番号）ごとに経営面積（自作地・小作地・貸付地面積）、年令別家族構成および花卉栽培の遅速、屋敷の大きさ等の社会的側面を示した。それによれば、花卉栽培を早く導入したのは、前述のように当時武陽高校の農業科を卒業したての若手であったが、彼らが屋敷内の前庭で野菜苗を栽培していたことにみられるように、比較的屋敷も広く、耕地面積も広い農家であった。つまり、早期の花卉栽培者は寺谷集落でも上層に属していたといえよう。現在花卉栽培を行っている農家も、経営耕地面積で比較的上位に位置するものが多いといえる。

なお、野菜・花卉の複合経営で野菜苗を振り売りもした人で、現在花卉栽培から撤退した農家は3人である。彼らは後継者が農外就業していたり、自分で農業以外の仕事を始めたひとである。これは産地の形成過程で何度か営農の意志決定を迫られた花卉・米麦複合経営農家が花卉栽培から撤退したことを意味する。寺谷集落では促成キュウリや促成ナス栽培の忌地性とも対応し、前述のようにほぼ5年ごとに意志決定を迫られたように思われる。

農用地利用増進事業による水稻の委託栽培が制度的に確立した1973年以前から、前述のように部分請負耕作が行なわれていた。寺谷で現在、花卉栽培農家で水稻を自分で栽培しているのは10軒であり、水稻栽培を委託しているのは15軒である。また、花卉栽培農家以外で水稻栽培を委託しているのは5軒である¹⁰⁾。したがって、3軒の水稻受託農家は寺谷の20軒の水田を耕作していることになる。このうち、A氏（農家番号1）に委託しているのは19軒、B氏（同3）に2軒、C氏（同9）に1軒である。しかし、この3軒は、寺谷主穀栽培集団を形成しているので、消毒などは水稻栽培を委託していない農家を含め寺谷の水田を全て共同防除している。

一方、花卉の山上げ栽培をみると、現在戦場ヶ原開拓地に5軒が山上げしており、1軒は軽井沢にも山上げしている。かつて軽井沢には3軒が上げていたが、現在では1軒のみになってしまった。花卉の山上げ栽培が寺谷で減少傾向にあるのは、花卉栽培の専門化・高級化により低地での花卉の周年栽培が進んだためである。花卉の山上げ栽培も鴻巣と日光との移動に加え冠水作業や花摘み、消毒などけっこう手間がかかる。したがって、寺谷で5軒の農家が戦場ヶ原開拓地に花卉の山上げしている



[水田(自作) 畑(自作)]: 花き栽培農家 A:草分け B:旧家 C:新宅 [水田(自作) 畑(自作)]: 水田(自作) [水田(小作) 畑(小作)]: 畑(自作) ★: 水稻の委託耕作 [水田(貸付) 畑(貸付)]: 水田(貸付) 畑(貸付)
 ●: 野菜苗の販売 ◎: 花卉園芸組合員 ▲: 山上げ栽培 □: 男 ○: 女 ☆: 雇用労働者

第6図 寺谷の農家経営と労働力構成
 鴻巣市役所農務課資料および聞き取りによる

のは、一人の花弁栽培者夫婦が戦場ヶ原開拓地に住み、花卉を管理してくれるからである。だから、管理の委託者は必要に応じて戦場ヶ原開拓地に見回りに行く程度である¹¹⁾。

一方、花卉栽培農家で雇用労働力を使っているのは1軒のみで、多くの農家が家族労働力のみで花卉栽培を行なっている。したがって、第6図に示したように多くの花卉栽培農家が3世代にわたる家族労働力を擁していることが、本地域の特徴であろう。特に花卉栽培の専門化、高級品化を志向する農家にあっては、3世代にわたる家族労働力の存在が不可欠である。しかも、家族労働力のなかにあっては、青・壮年層が花卉栽培の規模拡大、豊かな経験を有する老年層が新しい品種の作出に努力するなど家族内分業と有機的協力も進んでいる。この関係がうまく進展している農家は、付加価値の高い高級品種の栽培や新品种のヒット商品の作出が可能となる。このような農家の中には売上高が1億円に達しようとする企業的農家（corporate farm）も存在する。

これまでみてきたように水稲委託栽培、花卉の山上げ栽培は、鴻巣市寺谷における花卉栽培農家の施設化・専門化など規模拡大を促す持続的要因となりえてきたが、それを達成できなかった農家にとっては花卉栽培から撤退する契機となりうる。また、3世代揃った農家でも家族の一員が病気になったりすると、花卉栽培から撤退する契機となりうる。これらのことは、花卉栽培の持続的発展を支える要因が、時代的にも変わり多数あるのに対し、その支持条件のひとつでも欠けると花卉栽培から撤退させる要因となる。

V むすび

東京北郊にあたる鴻巣市の花弁栽培は、元荒川の自然堤防に位置する寺谷集落で始まった。米麦2毛作に基礎を置く寺谷では、後背地水田の反収が1俵少なかったので、それを補うためにトマト、ナス、キュウリなどの野菜苗を栽培し、戦中・戦後の東京および郊外の非農家を相手に振り売りを行った。野菜苗の振り売りの最中、花壇用草花であるパンジー、デイジーの栽培を勧められ、それを栽培して販売したところ、戦後の食糧難の時代にもかかわらず良く売れたといわれる。

自然堤防上の畑地での花壇用草花の栽培は、半促成キュウリやナス等の農産物と共存しながら次第にハボタン、サイネリア、シクラメンなど高級鉢物の栽培へ変化した。これらの花卉は東京の市場や地方の市場にオート三輪で出荷されたが、価格の不安定に悩まされた。そこで自分達の市場を設立しようという機運が高まり、1967年に鴻巣花市場、1972年に鴻巣園芸センターという2つの市場が設立された。市場の取り扱い量の増大は、各農家での花卉栽培への専門化を促し、花卉栽培の周辺集落、町村への拡散によってもたらされた。

花卉産地の形成過程で農家は花卉栽培に専門化するか、米麦に力を入れるかあるいは兼業化して農業から撤退するか等の選択を迫られる時期がある。鴻巣市寺谷では、1948年よりほぼ5年ごとに意志決定を迫られる時期が訪れたが、なかでも鉢物花卉の主産地形成には、水稲の委託栽培と花卉の山上げ栽培が大きく関係している。すなわち、花卉栽培に専門化して水稲栽培がおろそかにされる過程で、3軒の農家が花卉栽培農家の水田を引き受け、水稲の契約栽培を開始した。この水稲の委託栽培は、花卉栽培農家の専門化を一層促し、より付加価値の高い高級品種やヒット商品の開発などの、いわゆる

る企業的花卉園芸農家を産み出している。

一方、花卉の山上げ栽培は、軽井沢で始まり栃木県の戦場ヶ原開拓地と鶏頂山開拓地へと伝播した。現在、標高1,200mの高冷地にある二つの開拓地が中心である。高冷地での花卉の山上げ栽培によってプリムラ・ポリアンサスやシクラメンの花芽分化が速まり、低地の温室に下げて栽培を続けると一斉に開花する。それは丁度クリスマスや正月の時期に合わせて行われるので、花卉の鉢物は高価に販売できる。つまり、花卉の山上げ栽培は、花卉の付加価値を高め農家収入を増大させたばかりでなく、花卉栽培農家の規模拡大に連なったのである。

花卉栽培は中上層農を中心に支えられてきたが、その専門化・施設化は家族労働力の協力によって達成された。特に老・壮・若年労働力の揃った農家が、売上高の高い企業農家（corporate farm）になる傾向がある。

寺谷を中心とする鴻巣市の鉢物花卉生産の進展は、地域的には家族内労働力の協力、集落内農家の分業体制の確立（水稲の委託栽培）、地域間の環境利用（山上げ栽培）によって達成されたものである。また、鉢物の原料となる土壌や苔などより広域な地域に依存して持続的発展がはかられている。また、プラスチック鉢、農薬、温室など花卉の施設園芸に必要とされる資財を考えると、現在の日本の産業化社会に深く包摂されていることがわかる。したがって、施設化された鉢物花卉の生産は、工業化農業（Gregor, 1982; Healey & Ilbery, 1985）といえるものであろう。

本稿を作成するにあたり個々の花卉栽培者ばかりでなく、農林水産省農産園芸局果樹花き課、埼玉県農林部地域農業課の田島幹也、桶川農業改良普及所の半田洋一、鴻巣市農務課の渡辺秋夫、川里村産業課の新井 浩、鴻巣花市場の竹内行雄、園芸センターの吉田正雄、森田茂一郎および飯塚 孝氏には資料の提供など大変お世話になった。調査には文部省科学研究費一般研究C「花卉・野菜の山上げ栽培と主産地形成に関する生態地理学的研究」(No. 63580184:代表 斎藤 功)の一部を、また、まとめには総合研究A「日本業の耕作方式と再生産過程に関する農村システム論的研究」(No. 06301085:代表 斎藤 功)の一部を利用した。製図は筑波大学の宮坂和人および大学院の仁平尊明氏にお願いした。

なお、本論文を長年にわたりご厚誼を賜り、1989年日本地理学会秋季学術大会での発表の際、貴重な御意見を寄せられた愛知教育大学名誉教授 故松井貞雄先生に献呈したい。

註

- 1) 安行（赤間台地）は江戸時代植木産地であった、駒込や滝野川村の影響で植木栽培が始まったとされる（小田内, 1918）が、当時は花木の切花を中心としていた。明治以降桑やリンゴの苗木産地として発展し、街路樹や公園などの庭園樹の生産を経て造園業を営む大型植木産地になった（新井, 1984）。また、より付加価値の高い高級品種である盆栽へ志向するなど植木産地の内部分化も認められる。
- 2) 鴻巣園芸センター会長の吉田正雄氏によれば、野菜苗の栽培は川里村屈巢の大熊氏がナス苗を作っていたものを、寺谷の竹内才太郎氏が導入したものであるという（1989年4月7日）。
- 3) 当時において三色すみれのバンジーは、日本の蕁に比べ大きく、多彩で私共にもいわば異国へのあこがれとにおいをほのかに薫らせたようにおもわれる。
- 4) 鴻巣園芸センター会長の吉田正雄氏の談話による（1989年4月7日）。
- 5) 花卉市場へ生きのよい様々の鉢物を出荷するためには、良い場所を前日から確保して配列作業が行われるため、市日が隔日となる。したがって、実際にはやりくりしているものの市場関係者には休日が取れ

ないという悩みがある。

- 6) 17haのうち、農用地利用増進事業による借地権設定面積は7ha約であった(1984年)。
- 7) このような山上げ栽培技術は、日光ダナーなどイチゴでは早くから実施されていた(亀和田, 1967)。
- 8) 桶川農業改良普及所の半田洋一氏の談話による(1985年5月23日)。
- 9) 世界の食糧庫アメリカからの穀物の輸出は、アメリカ中西部で長年にわたって培われた土壌を消費させているので、土壌の栄養素の輸出にあたるという見解がある(桜原, 1993)。だから、鉢物花卉の持続

性のためには培養土が不可欠であるので、土壌がキーワードとなりうる。

- 10) 花卉栽培農家以外での水稲の委託栽培は、兼業化の進展、つまり本地域が都市化地域に編入されたことを反映しているといえる。
- 11) 筆者が本調査の契機となったのは、シクラメンの冠水作業に来ていた花卉栽培者に誘われたからである。山上げ栽培地での管理を委託しているとはいえ、消毒作業は薬害等が心配されるため、各花卉栽培者が山上げ期間の3カ月に5~6回実施している。

参 考 文 献

- 青鹿四郎(1935)：『農業経済地理』叢文閣, 463p.
- 新井鎮久(1984)：埼玉県安行における植木の生産と流通。緑化研究会編『日本の植木生産地域』古今書院, 32-53.
- 伊藤郷平(1953)：渥美半島の農業地域構造—その暖地性遠郊農業について—。愛知学芸大学研究報告, 2, 36-47.
- 岩崎健吉(1935)：南豆に於ける二、三の早熟促成栽培景観の人文地誌学的研究。地学雑誌, 46, 55-68.
- 太田理子(1977)：渥美半島赤羽町の農業構造。経済地理学年報, 23(2), 13-32.
- 太田理子(1979)：花き園芸における主産地形成の展開。経済地理学年報, 25, 244-262.
- 桶川農業改良普及所(1982)：『日本のアールスメールをめざして—鴻巣の花づくり30年の歩み—』, 35p.
- 小田内通敏(1918)：『帝都と近郊』大倉研究所, 215p.
- 尾崎通四郎(1962)：『わが国におけるマーガレット露地栽培地の地理学的研究』葵書房, 129p.
- 桜原正澄(1993)：日米農業関係と都市環境政策。『都市再生の政治経済学』東洋経済新社, 87-107.
- 加藤修一(1988)：埼玉県川里村の鉢花生産。農耕と園芸, 45(5), 155-157.
- 亀和田秀雄(1967)：『主産地の研究—日光いちごの生産経過と現状』。栃木県農業試験場, 65p.
- 関東農政局(1985)：埼玉県鴻巣市N農家。『都市化の進んだ地域における農業の対応〔経営事例〕』関東農政局, 159-169.
- 鴻巣花卉園芸組合(1983)：『花の鴻巣—10周年記念誌』, 320p.
- 斎藤 功(1981)：栃木県ブナ帯における夏野菜栽培の発展。お茶の水女子大学人文科学紀要, 34, 1-26.
- 斎藤 功(1982)：日本における夏ダイコン栽培地域の展開とブナ帯。人文地理学研究, 6, 181-212.
- 斎藤 功(1988)：高冷地環境を活用した園芸農業の諸形態。環境情報科学, 17, 80-84.
- 斎藤 功(1991)：やませ被害地域における花卉栽培の発展。地域調査報告, 13, 39-52.
- 佐々木博(1969)：江北地区の農業の変質。立正大学人文科学研究所年報, 7, 67-77.
- 沢田裕之(1968)：川崎市の花弁温室園芸地域。地域研究, 11, 44-57.
- 沢田裕之(1972)：神奈川県秦野市の花弁温室園芸。地理学評論, 45, 549-560.
- 尾留川正平(1967)：南伊豆の臨海斜面とその内陸側地域における園芸の比較研究。東京教育大学地理学研究報告, 11, 63-81.
- 松井貞雄(1967)：渥美半島における温室園芸の地域形成と地域分化。地理学評論, 40, 409-425.
- 松井貞雄(1968)：伊豆河津谷における花卉園芸。人文地理, 20(4), 13-42.
- 松井貞雄(1978)：『日本の温室園芸地域』大明堂, 309p.
- 松田藤四郎(1971)：『緑化樹木の生産と流通』明文書房, 248P.
- 森田明宏・半田洋一編(1986)：『さいそう』埼玉綜合園芸株式会社, 134p.
- 山内淳一・大内武次(1923)：農業状態。『南葛飾郡誌』南葛飾郡役所, 329-388.
- Healey, M. and Ilberry, B. ed. (1985)：『The Industrialization of the Countryside』Elsevier, 315p.
- Gregor, H. (1982)：『Industrialization of U. S. Agriculture』Westview Press, 259p.

Yamamoto, S., Asano, Y. and I. Saito (1976) : Geographical Approaches to Agriculture and Agricultural

Regions in Japan. in *Geography in Japan* (University of Tokyo Press), 113-142.

Sustainable Development of Pot Flower Cultivation in Kounosu, Northern Part of Outer Suburbs of Tokyo

Isao SAITO

Flower cultivation as a suburban farming started in the Setagaya district of Tokyo with the influence of westernized people at the turn of the century. Greenhouse flower cultivation diffused to the south bank of the Tamagawa River, in the southern Metropolis. On the other hand, pot flower cultivation developed in Shishibone, in the eastern Tokyo. Urbanization of Tokyo developed so rapidly with sprawling the farmland that flower producing areas were forced to shift from inner to outer suburban areas as well to favorable warm climate and highland areas. The pot flower cultivation has flourished in Kounosu, the northern outer suburbs of Tokyo.

In this paper the author elucidates the development processes of pot flower cultivation and their sustainability in Teraya settlement in Kounosu-shi. The Teraya settlement occupies on the narrow natural levee of the Motoarakawa River and is surrounded by backmarsh paddy fields. Because the rice yield at Teraya was 60kg per 0.1ha less than the neighbourhood settlements, some farmers started to raise the vegetable seedlings and vended them to non-farm households around urban areas of Tokyo during World War II. One consumer recommended a farmer to raise pansies, exotic flowers for Japanese in those days. Pansies as well as vegetable nursery seedlings were welcomed by urban dwellers and vended well, although they were suffered from food shortage just after World War II.

With the recovery of Japan's economy the varieties of flowers produced at Teraya changed gradually from pansy and daisy to flower cabbage, cineraria and azarea, then to cyclamen. All of these flowers were nursed as pot flowers. Although these pot flowers were shipped to Tokyo flower markets by small trucks, the fluctuation and uncertainty of prices bothered the farmers. Therefore, they established their own flower market, Kounosu Engei Shijo (horticultural market), in 1967. The increase of flower handlings enable the horticultural farmers to build the second flower market, Kounosu Engei Center, in 1972. Flower cultivation also diffused from Teraya to neighbouring settlements and villages. Materials of flowerpots changed from clay to plastic with various colour. Thus, the farmers gradually became specialized horticultural farmers, and Kounosu grew into one of the most famous pot flower centers in Japan.

Farmers had to decide whether or not they should continue flower cultivation to convert their occupations every around 5 years. Above all, their decision-making of sustainable development was related to the following three opportunities in addition to the establishment of their own markets. As many farmers tended to produce exclusively flowers, they entrusted the rice cultivation to the custom farmers. Custom farmers returned 20-25% of rice yields to pot flower farmers and all of straw residuals which became good organic matter for the nursery plants. Three cus-

tom farmers of harvesting rice emerged, therefore, with the specialization of pot flower cultivation in the Teraya settlement around 1973.

Secondly, horticultural farmers borrowed mountain fields to enlarge their farm scale. Mountain fields were located in Karuizawa, and Senjougahara and Keichouzan reclamation settlements above 1,000 meters from the sea level. They raised there such flowers as primula-polyanthus and cyclamens. Because the seedlings of these plants tend to have good flower buds under frost or cool climate before being nursed in greenhouses in the plain, these pot plants with full flowers were enjoyed the highest price by marketing at Christmas and New Year season.

Thirdly, horticultural farmers changed to horticultural entrepreneurs, one of the most high products farmer classes in industrialized society in Japan. Thus, they travel around the world in off-seasons in order to seek new varieties of pot flowers and ornamental plants, which will be marketed at the maximum price.



写真1 地元市場に出荷される鉢物花卉
 地元の花卉市場に出荷される鉢物花卉・観葉植物類。カットは鉢物を6段に積める花卉輸送用のトラック。鴻巣市寺谷集落（1985年4月）



写真2 ポリアンサスの山上げ栽培
 ポリアヌポリアンサスなどのプリムラ（サクラ草）類は、標高1,200mの戦場ヶ原開拓地で露地栽培される。寒冷紗をかけてあるのも、プリムラ類である。栃木県日光市戦場ヶ原開拓地（1983年9月23日）



写真3 鉢物花卉シクラメンの灌溉風景
 シクラメンの鉢は、ビニールハウス内に置かれているが、両袖が開放されており、雨除け栽培といえる。戦場ヶ原開拓地は鶏頂山開拓地に比べ平坦で、水利に恵まれていることが、花卉の山上げ栽培地になっている。この土地を借りているのは鴻巣市寺谷の花弁栽培者である。栃木県日光市戦場ヶ原開拓地（1983年9月23日）



写真4 自然堤防上のパンジー栽培の残象

パンジーは鴻巣市に導入された最初の花である。花卉の品種の高級化とともに殆ど見られなくなった。いわば、寺谷における花卉栽培の残象である。鴻巣市寺谷集落（1987年4月）。

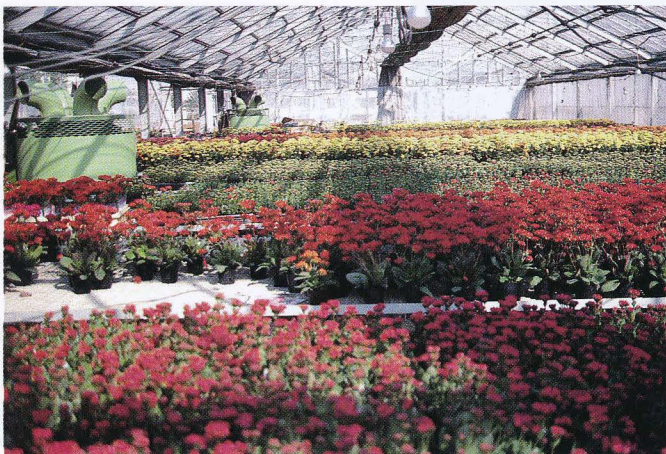


写真5 温室内の花卉栽培景観

ガラス温室の内部には、時期により様々な鉢物花卉がならぶ。これは4月初めなのでカラコエなど春の鉢物草花である。鴻巣市寺谷集落（1987年4月）。



写真6 培養土の原料となるローム土壌
花卉の鉢物栽培は、いわば土壌を売る産業なので、培養土の手配が重要となる。花卉栽培の持続的発展のためには土ばかりでなく、苔など他地域に依存する割合がますます高くなる。鴻巣市寺谷集落（1987年4月）。